

質問項目間の関連性を総合的にみるため、分析方法の一つである因子分析を行った。その結果を以下の9点にまとめる。

- (1)「家庭が楽しくない」「疲労感がある」「自分の命は自由にして良い」「ムカツク」「生きていて仕方がない」の関連が示された。厳しい環境にある子ども、問題のある成長・発達が予想されている子どもの層が浮かび上がった。
- (2)「我慢強い」「思いやりがある」「勉強が楽しい」「学校の勉強が理解できる」「クラスの仕事ができる」子どもの層も浮かび上がった。学力向上には自己統制、思いやり、責任感を並行して育てる取り組みが有効であることがわかる。同様に「生きていて良かった」と感じる子どもは「自分が好き」「自分によいところがある」と思っている。生きがいがづくりのための自尊感情の育成の重要性もみてとれる。
- (3)「自分の気持ちを素直に出せる」「ノーといえる」「うまく言える」「人の目を見て話せる」といったことの関連性が示された。幼児期からあいさつ等によって、人の目をみて話すことが大切ではと推測される。
- (4)「友だちがいじめられていると腹が立つ」「人のために何かしたい」「人や動物に対して痛みを共感できる」で関連性がみられる。人権意識の向上には人とのかかわり、利他性や共感性を育むことが有用であることがわかり、共に感動したり、他人のために行う活動を子どもに体験学習させることも必要であろう。
- (5)「人のにおいが気になる」「自分がしていることが自分がしているように感じられない」「命は生きかえる」「なぐりたくなる」「テレビなどの音を大きくして聞きたい」の関連がみられる。直接的な人との関係を持ち得ないまま、暴力性をたかめているのではと考えられ、存在感を感じられるような機会が必要である。
- (6)「早寝」「メディア総接触時間」「食事時のテレビ視聴」「気持ちのいい起床」に関連が見られる。「早寝早起き朝ご飯」はメディアとのよりよい関係づくりから、ということが実証されたといえよう。メディア時間等の充実した取り組みが緊要であり、学校、地域、家庭、NPO等の今後の活動が期待される。
- (7)「スポーツをする」「外遊びをする」「左右の視力差がない(立体視力がある)」の関連がもられる。外での運動等によって奥行きのある感覚が育つのであろう。
- (8)「わかってくれる友だちがいる」「友だちとうまくやっていく自信がある」が関連している。相互に関連しており、わかってくれる友だちができる子どもに対する環境づくりが求められる。
- (9)「人と直接接触する遊びが好き」「粘土などが好き」「一人であるほうが落ち着くということはない」というのが関連している。一人が好きな子どもは五感を使った遊びが苦手であることがわかる。部屋の中でメディアに向かうような生活ではなく、五感を存分に使う遊び等の体験を小さい頃からしていくことが求められる。